

どうのとかいうことです。そういうことに対して非常に関心がある層というのは現実にやっぱりいると思うんですけども、それは今日先生がお話になられたその流れの中でどういうふうに位置づけられるのか。あるいは先生ご自身はそういうものをどういうふうに評価されるのかというのをちょっとお伺いしたいと思います。

島菌 江原氏の世界と「千の風になって」の世界はかなり近いと思います。非常に孤独で、そして非常に親しい、濃く細いというか、非常に緊密だけれども、支えられていないつながりというものがあると思うのです。大事な人の数が少ない。それこそ携帯電話で常に繋がっている人というのはそんなにたくさんいない。その人との繋がりが切れるともう非常に孤独になってしまう。そういう感じがあるのではないか。少数の人が別れてしまうと、全く慰められない、そういう思いを持った人が多い。そういう人に江原さんは慰めのメッセージを出しているのです。江原さんはしばらく前ならばほとんど教祖みたいな人だと思いますね。実際に信奉者は教祖的な崇敬心を持っていると思うんです。

もう一人、飯田史彦さんという方もいます。ご存じの方いらっしゃいますか。福島大学の先生で、ネットで情報を発信し、書物でそういう霊的世界のことを言っている方です。その方も教祖に近い方だと思います。非常に見事に書いてあります。ですが、あの方たちが大事なメッセージを発する相手との間の関係は非常に薄い。決して人間的な交わりにはならない。メディア的な、マスメディア的な交わりです。飯田さんは時々講演会をなさる。そして音楽もなさる。江原さんもそうです。また、握手はする。しかし決して対話はしないし、個人的な指導はしない。だから読者は手紙は書いていいんだけど、会いに来ちゃいけないというわけです。これは非常に現代的で、ある意味では責任を持たないということだと思いますね。ですから発信はするけれども、責任は持たないような体制になっている。それが非常に大きな問題です。ですからメディアがああいう情報を流すと、人生観に深く関わるような問題を、責任を取らないような体制で、いわば垂れ流している。それは大いに問題だと思っています。

それは江原さんという人がもし一対一でやったならば、大変心強い相談相手になるのではないかということと、美輪さんならもっとそうかもしれないけれども、そういうことと、現在彼らが活躍しているあり方という

のはそぐわないのではないかというふうなことを思っています。いずれにしろ、孤独な社会の病理みたいなどころがある現象だと思いますね。

質問6 生きるということに対してですね、個人を支えるということが大事だという先生のお話はよく分かりました。実は私の実の妹が筋委縮症に罹っているんですよ。それで現代の医学ではもう治すことができないと言われていたらしいんです。どんどんどんどんそれが進行しましてね。今寝たつきりで食べ物も食べられないで腹の脇から液体を注入しています。最近言葉も言葉にならないほど進行しているんです。

そういう時に個人の支えというのがないんですね。それで夜になると、自分が思うようにならなくて泣いたりするんですよ。そういう場合に、先生のそのスピリチュアリズムという、そういうのを活用するということができないでしょうか。

島菌 ちょうど私の身近にも似たような立場の方がおられます。その方の場合は、その夫の方がそういう病気で、奥さんが私の近くで仕事をしているという方なんです。その奥さんのほうをできるだけ応援する。それで我々の大学院生などもいろんな形で応援する。お見舞いに行くということが良いことかどうか分からないんですけども、例えばその方が仕事に來れない時は、別の人がかわりに来る。そしてその人の奥様がいろいろ悩んでいることについて話し相手になる。そういうことをやっている。そしてその方の場合は近所のボランティアの方がいろんな形で手伝いに來られるらしいです。そういう時代になっていると思います。では近所の方はどういうモチベーションでやっているのか。宗教を持っている方もいるでしょうし、普通の道徳心でなさっている方もあるでしょう。しかしそういう方たちを支えているものの中には、何かスピリチュアリティと言っているような、宗教というほどにシステム化されていないけれども、何か大事なものがあるということを信じて、その信念でそういう援助ということをしている方がたくさんおられると思うんですね。

そしてそういう方たちの交わりを助けているいろんな文化がある。映画だとか小説だとかですね、そういうふうにあります。またインターネットがあるとしますね。そういう病気の人、特定の病気で苦しんでいる人は、たいい患者さんや周りの人たちが情報公開しあっています。そういうことがすごく今は大事になっていると思います。ですからそういうつながり

を周りから応援する。つまり自発的にできてくるつながりに容易にアクセスできるような社会の仕組みを作っていくということです。これはアメリカは得意なんですね。アメリカは元々教会というものがそういうふうに自発的に作られるものであり、いろんな人助けの組織を作る社会システムなのです。アメリカはそれを世界に広めたいので、新自由主義みたいな思想が広まっているというところもあると思うのです。

日本の場合は親族組織で昔やっていたことを、ややアメリカ風の自発的なつながりを皆で支えるというか、そういうタイプのやり方に今変えていく途上にあるんじゃないかと思います。さぞかし本当にご心配なことだと思います。お大事にどうぞ。

質問7 本日はありがとうございました。先ほど学生さん、これ東京大学の学生さんでしょうか、自殺を考えたことがあるかという質問に対して、相当数の手が上がるというようなお話もありました。現に自殺自体が、若者に非常に多いということを知っています。普段、学生、若者とも接していらっしゃる先生に、敢えて若者の死生観ということで、もう一段深く教えていただきたいなという部分がありました。

最近、直近で秋葉原の事件がありましたですね。人を殺して自分も逝っちゃうんだみたいな、そんな気持ちがあったなどと報道されていますけれども、ああいう学生も県でナンバーワンの進学校で、ずうっと勉強してというところがあって、非常に現代の何と言うんでしょうか、教育とかそういう部分での社会問題、病巣みたいなのが非常に表れている事件だなと思います。そのへんとですね、若者のそういう、現代の若者に絞ったその死生観みたいところで、社会問題との関係にちょっと照らし合わせて、先生のお考えを少しお聞きできればなと思います。よろしく願いいたします。

島菌 さっきの『バカボン』の話なんですが、やはり若者には死ということが近くなっている。ある意味で近くなっている。何と言うか、すぐそういう話にいくということですね。輪廻転生もそうですが、それはまた孤独な魂というものをすごく意識している。それは周りから受け容れられないという感じで、ひねくれているというか、被害妄想になっているというか、非常に自己中心的な、自分しかいない世界を作っちゃっている。そのことと死が近いということがどこかつながっているという感じがするん

ですね。

これは例えばイスラム教徒の留学生と話すとやっぱり違うなと思います。自殺は神に禁止されているという世界とだいぶ違う。これはやっぱり日本文化の弱点。どこか自分の命を軽く見てしまうところがある、ということを考えなくてはいけないと思います。

しかし若者が何故自分の命を軽く考え、あるいは人を殺してもいいと思うかという、社会全体がそういうメッセージを送っている。人の命はそんなに重いものではないよとか、役に立たない命は必要がないよというふうなメッセージを送っているのではないかと思うのです。これは先進国全般に言えると思うのですけれども。

子供の頃から「あなた勉強しなさい、勉強しなさい」と、社会で少しでも良い地位を得ないとあなたの人生は価値のないものになってしまうと、あらゆる方面から子供の時から徹底的にたたき込まれている。そのようなことがあるので、そこを何とかしないとけません。若者の自己中心性だけに責任を帰することはできない。社会の方の責任ということがあると思いますね。何よりも何かできることがある。それから人と一緒に生きているということにこんなに素晴らしい価値があるという経験が得られるような、そういう環境を作っていくということが大事だろうと思います。

ボランティアなんていうのを経験すると、ガラッと変わったりする子がいますよね。ちょっと話しかければ良かったのになあとということがあるんです。あの時に一言言えなかったためにこんなことになってしまったということがある。ですから人間は弱いはかないものだと思うんですけれども、それだけにできることもあるというふうに思います。

質問 8 どうもありがとうございました。戦前から戦後にかけての死生観ということで、少し何となく整理できるというか、そんな感じがいたしました。

最後にまとめられたところで質問させていただきたいと思いますけれども。武士道ということで、潔い死というようなことを言われました。あともう一つ、生きたいということですね。お父さまが死ぬ間に「生きたい」ということを言われたということで、そこにもっと共同体といいますか、家族との一体感のようなものを求めていたということですね。先生は、そこではっきり二つに分けて説明されたような気がしたんですね。後者の方

が、これからの死生観として認められるんじゃないかというふうに受け止めましたけれども。

結局どちらもやはり皆と一体になりたいわけですよ。結局、潔い死も、そこに美意識というものがあって、やっぱり精神というものを後の人たちに残そうという気持ちがそこに働いていると思うんですね。これは自分の肉体が減んでも、自分が考えたものを後の人に伝えなければいけないという信念のようなものがあるんだろうと思うんですね。そこには美意識というものが働いていて、肉体は減んでも精神は残るというような感じはあると思うんですが。

後、病院のお話がちょっとありました。僕の母も亡くなる間に、まだ生きたいというようなことを言っていたので、個人的にはですね、そのお話は分かるし、人間には肉体が減ぶということに対する恐怖というのは当然あるわけで、やはりそれを永遠に周りの人たちと一緒に過ごしたいという願望はあるわけです。ただこの場合は、肉体の存続を願望しているということで、精神ということとはちょっと違うんじゃないかなと思います。同じ、皆といたいという、共存したいということがあっても、片方に精神があり、片方に肉体というものがあるんじゃないかなということですね。いずれにしても僕はどういう形で遺すかということが、個人にとって必要なことかなと思います。死生観は個人的なものだということを先生はおっしゃっていましたけれども、それにつながるかなと思うのです。

先ほど先輩の方が、死ぬ思いをしたけれども、戦後に帰ってきて、その現実を見て、死んでいれば良かったと思ったというようなことを言われていましたけれども、これはまさに美意識の問題だと思うんですね。現実の世界が自分のもっている美意識というものを覆すような状況になってきた時には、やはり何らかの形で自分の考えを、精神を残さなきゃいけないというようなことも出てくるんじゃないかなと思います。

そこで先ほどの武士道というか潔い死というものとのつながってくるんじゃないかなということですね。実際に今の社会が資本主義社会であって、物質中心的社会ということになってくるとですね、今までのような家族と連帯できるようなそういう社会というのは段々崩壊してきて、やはり個人々が生きざるを得ない。そういう状況がありますよね。その時にその絆というのはどういうふうにあればいいのかということになると、僕は今、

イスラム教が強くなっているという一つの要因はそこにあると思います。同じ絆でも精神の絆がある。日本にはその絆が何もないというようなことで、先ほどこいわれた若者の殺人とかいろんな問題が出てきています。最終的には何か絆をつくる。あるいは日本の例で言えば美意識というものをもっと構築していく必要があるような気がするんです。その欠如がやはり全体の絆を薄めていると思います。

美意識があれば、あるいは団結があれば、何か辛いことがあっても、孤独も過去のものとなって、思い出になって打ち消されるわけですから。何かそういう団結とか絆を深めるためのものを、もうちょっと構築していけばいいんじゃないかなと、ちらっと思いましたが、先生のご意見をお願いいたします。

島 菌 私は、共同体ということをかなり強調したと思うんですけども。絆とかつながりという時は必ずしも共同体だけではないし、それから精神的な絆、つながりというのが大事ではないかなと思います。それには具体的に誰と誰がということよりも、それも含めてですが、理念みたいな、基が大事だということですが、おっしゃる通りだと思いますね。

ある時期から学生が、武士道ということにすごくポジティブになったので、どうしてだろうと思っていたら、映画で「ラストサムライ」というのが流行ったんですね。「ラストサムライ」という映画はハリウッド映画です。企画はアメリカ人が作って、役者は日本人ですが、日本の明治後のサムライスピリットを非常に美しく描いている。それに連れて武士道ブームみたいなのが広がったんですね。つまりそれはサムライスピリットはグローバルに見てなかなか魅力があるんだなということでもあると思うんですね。ですからサムライスピリットの中の大事なものを再評価するというか、現代的に活かし直すということは考えるべきだと思います。

しかしサムライスピリット、潔い死の中には、例えば心の中みみたいなものが日本の伝統の中にはあってですね、とにかく早く死ぬことを美しいとするものがあり過ぎるなという気がするんですが。サムライスピリットの中でも、これははっきり検討されていないと思うんですね。おそらく浄土教と非常に深い関わりがあります。『一言芳談』なんていうのがありますが、その中世の文献、浄土教文献の中にも、とにかく早く死んで極楽浄土へ行きたいという一心になることを勧めています。浄土のためにすべてを

惜しまず、もっぱら浄土だけを考えることがプラスだということです。これは日本の浄土教の一つの特徴ですが、どこかで潔い死とつながっていると思うんですね。これは江戸時代の武士道書である『葉隠』の世界というのが、どういう宗教的な背景で形成されているかというようなことを検討してみなくてはいけないと思います。日本の浄土教は、末法思想に則って仏教をある種の形に持っていったのですけれども、その浄土教において人とのつながりとか社会というものがどういうふうに理解されているかということを検討する必要があると思います。そういうことがなされていない。つまり武士道というのは美的に美しいんですが、その倫理的な意味とか社会的な意味みたいなことはあまり検討されていない。歴史的に果たした役割というようなことも十分に理解されていないのではないかと思います。

そこへいくと、キリスト教の伝統というのは、いろんな理屈をこねて、ああじゃない、こうじゃない、良い悪いと言って議論している。そのへんの議論が日本の精神的伝統にはやや弱いんじゃないかと思います。

そういう意味では、おっしゃったことに大体賛成なんですが、そういう精神的な伝統とのつながりを強めるためにはやっぱりそれを自覚的に考察する、反省し議論し記録するというか、そういうことが必要だと思うんですね。武士道ブームにはそれが弱いなというふうに思っています。それからつながりという場合には、確かに武士道の中にあつたような孤独に耐えるというような精神、そういうのが必要だということにもまあ賛成です。

しかし相変わらず、日本の文化の中ではしっかりと自立心を持つということが弱い面がある。私も今日の話では、絆ということを強調したわけですが、そのことと自立心をしっかり持つということがどうやって両立できるかということが相変わらず大きな問題だと思っています。

質問9 本日は大変充実した内容で非常に日本の明治以降、あるいはそれ以前からの宗教観というものの変遷を明確にさせていただいて感謝しております。

一つ伺いたかったのは、戦中派の非常に悲惨な経験をいろいろ踏まえた上での話でございますけれども、その次の世代になりますと、これは多分私ぐらいの世代が中心だと思うんですけれども、戦前も知っているし戦後も知っているということなんですけれども。それは何か現世主義的というふうな表題でまとめられたことに、ちょっと抵抗感がございます、

これは日本の感覚でいいのかもしれないんですけども、そもそも現世と来世という明確な区別というのは果たして日本の宗教観にあるのかどうかということでございます。キリスト教あるいはそれに遡るギリシアのプラトン主義あたりから、この世とあの世の区別というのは明確になってきます。もしこれを英訳されると、外国の方には誤解を招くのでないかと思うんです。

先生がいろいろおっしゃっていますことは、ある意味ではそのような見方を訂正するようなことかも知れません。生命主義的救済観とか、それから宇宙の本体とか、そういうようなことをおっしゃいました。それから死者との親しみの感覚ともいわれました。その生命主義的救済観というのは、この世的な生命だけではなくて、日本人が持っている生命観というのは非常に昔から、あるいは神道なんかとも結びついたのであるかもしれませんが、神道では、私も詳しくないんですけども、現世（うつしよ）と幽世（かくりよ）でございますか。何か一応区別はあるけれども、重なり合っているというか、融合しているというか。仏教なんかでも、消滅する世界と、それから真実の世界というのが一ではないけれども、異なっている。そういう非常に独自の考え方でございますね。ヨーロッパの考え方を図式化するとすると、縦に上と下と別れるという感じですけども、そういうふうに図式化できない。何かそういうことを踏まえないといろいろ誤解を招くと思うんです。

私も親を亡くしましたし、知人たちも生涯の伴侶を亡くしたり、いろいろな方がいるわけですけども。遺族の方に聞くと、何か不思議と、それは特別な傾向のある人たちと付き合っていることなのかもしれないですけども、私が中学の時に同級だった女性でクラスメートだった方が、20年ぐらい前に癌で6年ばかり大変苦しまれて、そして亡くなったんです。ご主人が本当によく最後まで介護されました。大手術だったそうですけれども、ご主人はその時既にお医者さんに、寿命はこれこれの長さだと聞かされたそうです。しかし絶対に奥さんに言わなかったそうです。それでも最後まで本当によく看取られて、感心していたんです。もう亡くなってから20年ぐらいになるのに、今でもその奥さんといつも話をしているというんですね。それでお子さんは残念なぐらいらっしゃらなくて、私よりも10年も上の方なんですけれども、病気一つしない。日蓮宗でいらしたので、最近は

割といろいろとその系統のお寺巡りをされたりすると、いつでもその奥さまと一緒にいるという感じで過ごしていらっしやるんです。似たようなことはいろいろあるわけです。何かの時に亡くなった親が交通事故直前に助けてくれたとか。そんなことを非常によく耳にします。今生きている人にとっては亡くなった人というのは生き続けているわけでございますね。

それに対して私が非常に尊敬するドイツ人の学者、哲学者の方を知っているんですけども、私も存じあげていた奥様と本当に仲の良いご夫婦だったんですけども、奥様が数年前に亡くなったんです。今だにですね、奥様がないからもう研究する意欲も出ないとかこぼしてこられるんです。私は、「いや日本ではこうなんですよ」なんていうお手紙を差し上げるんですけども、それでもなかなか立ち直れなくて、それで最近の「千の風になって」をお送りをしたんです。英語版がございますので。そしたらちょっと元気が出られたんですね。お墓参り行かれたりしたそうです。でも、その後またいろいろご不自由をおっしゃってくるんですね。

その先生はギリシア哲学もご存じなので、ギリシア、プロテスタントあたりがご専門なんです。カトリックの信者で、カトリックの教会でパイプオルガンなどもずっと弾いていらしたんです。やっぱりキリスト教では、死後の世界というのは遠いんですね。何かある意味じゃ気の毒だなと思います。生命主義的救済観というか、宇宙的生命観というのは、ずうっと近世、近代以降のキリスト教には希薄だと思うんです。それでも例えば神秘主義、ヨークの神秘思想なんかを見ると、死を超えているんですね。例えばエックハルトあたりのを見ても、十字架にかけられるということは飛ばしているんですね。神秘主義はそういう受難とか、死をどうとらえているのか。とにかく生命しかないんですよ。もしかしたらそれは逃げではなくてですね、確信だったんじゃないかと思うんですね。永遠の生命というのが、この目に見える世界だけではなくて、やはり目に見えない世界を貫いていて、そしてそれに気付くということが真実であり、本当の救済はおそらくそこへつながってくるんじゃないかと思います。

それで私はいろいろ死生観を扱うということは、それは非常に大事だと思っています。多様な社会の中でいろいろと対応の仕方が違うと思います。最後に先生は、死の意味についておっしゃいましたね。宗教といっても多様な表れだけでなく、根本にある何かを、アジア的と言ってもいいんです

けれども、あるいはそれは普遍的かもしれないけれども、そういうものを明確にさせていただけるとありがたいと思います。失礼しました。

島 蘭 お墓参りはアメリカ人はあまり行かないですね。しかしメキシコ人はかなり行くんじゃないかと思えます。それから「万聖節」と「万霊節」というのがあるんですね。その日はお墓参りに行くことになっている。カトリックや、たぶん正教会、オーソドックスもそうですが、もっと死者が近い世界があったんじゃないかと思うんですね。これはやっぱりプロテスタントが生者と死者の間をピッと分けた。そういうことがあったと思います。もちろん元々はキリスト教にそういう側面があったと思います。私、シナゴークへ行きました。ヨムキプールの時に連れて行ってもらったんです。アメリカでですね。その時にその一年に死んだ方の名前を全部読み挙げて、その遺族の方が立つ。それから過越しの祭りの時はですね、父祖から伝えられた教えを、つまりモーゼが同朋をエジプトから救い出したという物語を語るわけです。ユダヤ人の場合は同朋意識が強く、その同朋意識は大昔から未来へつながっている。だから同じ一神教といってもユダヤ教はかなり世代の連続感が強いし、カトリックもそういう面があります。ですからプロテスタントというのがちょっと特殊な、歴史の異変をつくったのではと思います。これはマックス・ウェーバーあたりもそういう考え方があります。

デーケン先生は死生学を日本に広めた方ですが、あの方はカトリックです。十何歳の時に兄弟姉妹の一人が亡くなった。その時に死について考えて、亡くなった時には家族がまた一緒になれるという気持ちがいかに慰めになったかと言っています。死んだら家族一緒になれるかとキリスト教徒の方に聞くといろいろなんです。いやそんなのではないよと、みんな平等だから、別に家族だから近いということはないんだという人と、カトリックの人は大体、家族一緒になれると言うんですよ。モルモン教はもっとそうです。

ですから、むしろ共通の基盤はですね、むしろ死んでも絆がつながっているという感覚です。こっちの方が人類の長い歴史を踏まえている。宗教の中にはいろんな異変が起こるので、そういう偶像崇拜の否定みたいなものがある方向へいくと、そういうものを否定する。

これはヨーロッパの近代に起こったことなんですが、東アジアでも儒教

がややそれに似たようなことをやったんじゃないかと思います。東アジアの近世儒教は非常に現世主義的で、この『論語』の中に「いづくんぞ、死を知らん」という言葉があります。要するに生きえ分からないのに、何故死のことを考える余裕があるかというわけです。そういう思想を少なくとも知識人はかなり真に受けている。しかし朝鮮では、朱子が規定した、非常に丁寧な死者儀礼を真に受けてやっている。そういう矛盾の関係にあるんですね。日本の場合はそれは仏教に任せて民衆は熱心にやっている。しかし知識人の方はやっぱりある種の現世主義のほうにいつてしまった。

まあですから、すぐ近くに向こうの世界があるという、ある意味では人類普遍の精神世界を近代文化は西ヨーロッパを中心に否定してきた。それに東アジアはある程度乗ったとか、あるいはむしろ同時進行をしたといってもいい。そういうところがあるんじゃないだろうか、そういうふうに思います。

それからもう一つは、現代はグローバルにそういうことが進行しているということがいえます。一人ひとりが自分で道を見つけないと、共通の文化として死者が近い文化というのを見つけないといけない。そういうことなので、戦後の現世主義というのは、一面しか見ていないということに私も気が付いたということなんです。つまりその時代に実はこんなに死者儀礼がなされていたんじゃないかということがあります。おっしゃることはその通りだと思うんですけども、私としては一応いくらか弁解はあるということをお言います。

質問10 私は韓国から参りました。今日は日本人の救済観、死生観について伺いましたけれども、救済観と死生観は宗教と強く結びついているような気がします。今、日本の宗教には、古代からの、仏教、儒教とか神道とかというものの影響が非常に強く残っているような気がします。

その中で今の日本人の死生観というか救済観に影響を与えている普遍的な宗教は何だろうというのが一つの質問です。先生のお話を聞くと、いつか読んだ『城の崎にて』という小説が心に浮かんできました。ご存じの通り、蜂の死を見て感じた話。日本の方々はどういうふうに死を見ているか。死についての諦観とか認め方とか、そういうものとですね、日本人の今の宗教がどうかかわっているのか、例えば生きて神道、死んで仏教なら、今の日本人の死生観と救済観に影響を与えているものは何だろうかと思いま

す。

それで先生も少し触れてくださいましたけれども、例えば日本の集団的な犠牲といましようか、例えば個人的な必然的な死じゃなくて、権力によって強いられた集団的な死、いわゆる戦争ですね。そういうことについて先生がさっきご紹介くださったのは、近代から現代までの優れた学者のお書きになられた本を中心としてその流れを教えてくださいましたけれども、私の興味があるのは、日本人の全般的な死生観は何だろうかということです。死生観じゃなくて生死観とも言えるかも知れませんが、日本人は生きていることよりも、死ぬことをまず考えるのか。そうじゃなくて今の日本人にいろんな精神的な影響を与えている神道というのは、死んだ後の世界を含めていないんじゃないかという気がします。

島 蘭 神道にも、またいろいろあります。今日ちょっと天理教の話をしました。天理教の場合は、死んだらば神さまの元へ戻るのです。だけれどもまたこっちへ出てくるので、死後の世界というのは一応あるけれども、あまり重んじない。こっちへ出てくるということを重んじる。これはまあ現世主義的ということですね。

しかし神道の中にこのパターンだけかと言うと、さっき先生がおっしゃったように幽世的な、これは近代になると霊界と言ったりしますが、すぐ近くにもう一つの世界があるという考え方もあります。これは行き来はできる。ですからテレビでもしょっちゅうそういう霊能者が出てきて、死者のメッセージを伝えるというふうなことがなされる。これは神道的な伝統よりもむしろ folk religion 的な民俗宗教的な伝統の中にある。韓国ではムンダンの伝統に近いようなものじゃないかなというふうに思うんですね。

日本の場合はやはり韓国よりも浄土教の影響が非常に大きいと思うんですね。ですからある時期から浄土教に従って死を考える。死んだら仏になるという、この意識はかなり広まって、今でも大きな影響を持っていると思うんですね。

しかしその浄土教の場合は、遠い西方極楽浄土に行くはずなんですが、しかし熱心に供養するので、死者のためにいろんな儀礼をする仏教でもあるわけですね。ですからこれが神道とは別に非常に重い流れを作っている、そういうふうに思います。

それともう一つはですね、その浄土教、これはまた無常という考え方も

関係するんです。無常というのは、本当に世界中にある考えだと思うんですけども、日本ではやっぱり仏教と結びつき、そして芸術、芸能の中に非常に広く行きわたっているのです。例えば短歌を作る、俳句を作る、さっきの一茶がそこにつながってくる。あるいはそれこそお花見をするというのは、仏教的なものに影響を受けた無常観が美的に表現されている世界だと思うんですね。ですから日本の場合は、そもそも死生観や救済観がやや美学化されて、それだけ宗教者があまり尊敬されない。そういう美的な享受の中で感じ取るというところがあるんじゃないかと思います。

それはですね、ある意味では教条主義にならない、そういうリゴリズムにならないという美点を持っているけれども、今日のご質問の中にもあったように、ちょっと芯がしっかりしない。理屈を筋立てて通すという人が少ないわけだから。そのためにどうしても集団主義に馴染んでしまうというふうなところがあるんじゃないか。芯を通して、宗教の論理を通すという伝統が弱い。これは浄土教でも、末法思想というのはそもそも、芯の通るような宗教は成り立たないという思想なのです。それが一つ、日本の特徴になっているんじゃないかと思います。

質問11 その浄土教というのはいつから入ってくるんですか。何世紀に。

島菌 これは結構早いと思いますね。最初からあるのかもしれませんが、8世紀、9世紀には相当の力を持っていると思います。

質問12 8世紀と9世紀とすると、天台宗と真言宗が入ってくるのと、ほとんど同時に入るんでしょうか。もうちょっと遅いんじゃないんでしょうか。

島菌 浄土教が広まるのは平安のある時期ですけれども、浄土という考えは大乗仏教のかなり広い基盤と共にありました。

質問13 浄土教に非常に興味を持つのは、私がユネスコにいた時にシルクロード調査というのをやったからです。浄土思想というのは完全にシルクロードの産物です。西方にあった天国の思想、救済の思想がシルクロードを通して、仏教と合体して入ってくるわけです。だからその浄土思想で救済、死んで天国に行くこと、キリスト教徒だったら聖人になるとか、そういうことと仏になるというのはほんの紙一重のところにある。あれこそが文明間の対話なんですよ。浄土宗という文明間の対話の産物が日本に入ってくる。法然あたりで確立するんでしょうかね。

島菌 いや天台の修行の中にも念仏があります。

質問14 いや、念仏はありますけれども、浄土という考えはどうでしょうか。

島菌 そうですね、浄土教的なパラダイスはいろんな意味で西欧的、一神教的なパラダイスと違うと私は思います。

質問15 「阿弥陀浄土図」というのは敦煌の莫高窟に現われますね。しかしそれが現れるのは、初期の莫高窟じゃないと記憶しています。浄土は阿弥陀浄土図として提示されているから、阿弥陀という仏さまが現れなければいけないということがあります。ところが阿弥陀にはアマターバとアマターユスという呼び方があるじゃないですか。

島菌 そういう救済仏という考え方は、大乘仏教の本当の初期からあるのもっともっと遡りますよね。

質問16 まあ源信がいますよね、法然の前に源信がいる。もっと前でしよう、本当に入って来たのはもっと前だと思う。

島菌 最澄はそういう天台の修行を持ってきますけれども、その中には念仏が入って、浄土を観想するというのが入っていますので。

質問17 多分そうでしょうね。入ってくると思います。それを受けているわけだから。ですからそうでしょうね、きっと。

島菌 日本の浄土教で大事なものは、末法思想と結びついていて、誰でも救われるので、審判ということはからんでいるんだけれども、厳格な審判じゃないということです。ですから悪を犯しても救われるということになってくる。

質問18 そうすると親鸞ですね。

島菌 でもそれはもう浄土教全体にあることで、それはまた戒律を否定するということにもつながっています。

質問19 親鸞の「悪人正機」というあの考え方は、「悪人においておや」というのがあるから、「悪人でも」じゃないんですよ。

島菌 「悪人でも」じゃないです。

質問20 「ましてや悪人において」ということですね。カトリックで言うと、あれはフェリックス・クルーパーという考え方です。フェリックス・クルーパーというのはある意味、悪人正機ですよ。

質問21 ああ、そうですか。

質問22 幸いなる罪ということですか。

質問23 ああ、なるほどね。

島菌 要するに、日本の浄土教の特徴が、末法思想だということは、この世に対する責任がなくなるといふか、薄くなっているということがあります。ですからやや逃避的ということですね。仏教全体にそういう傾向があるとされるかもしれませんが。戒律を守ることによって、ある種の社会に対する責任を負うというのが元来の仏教だとすると、戒律を否定したということは、そういう堅固な生活を送ることによって、この世の秩序と違う秩序をつくるという宗教の持っているある傾向を否定したところが、日本の仏教にはある。その代わりに庶民に入ったんですね。

それは聖と俗の区分が、何か柔らかい緩いものになったということでもあると思うんですね。これは日本の仏教は聖（ひじり）の仏教だと。だから西行は「遁世」と言うんですけども、そもそも僧になることが遁世のはずなんですけど、大体僧侶の集団というのがあまりに世俗的なので、そこからもう一回出るということですか。しかしそのためにはまた民衆に近づかなければならぬので、民衆のために芸能をやったり、いろんな勧進ということをやったり、そういうことですね。ですから西行はおそらく結婚もして、短歌を作るというのはそういう貴族社会に出入りしたし、勧進帳の世界ですね。

質問24 西行自身は武士じゃないですか。

島菌 元々武士ですが、出家をしたら非常に純潔な俗から離れた聖なる生活をしたかという、聖（ひじり）の生活というのはある意味じゃものすごく俗な生活で民衆に近い。また、芸術とか芸能に近いといふか、そういうところに日本の宗教性が見られます。

質問25 高野聖とかですね。

島菌 そういうタイプの宗教が今だに続いている。俗に馴染んで美的なものに近い、そういう宗教意識というのが続いている。

それでさっき『一言芳談』という本の話をしたんですが、まさに高野聖の文献なんですよ。これはですね、小林秀雄が「無常ということ」という文章を戦争中に書きましたけれども、それはこの本を引いているんですよ。私はあの文章はやや怪しい文章だと思うんです。つまり潔い死ということを褒めているのではないかと。戦争中にそういう発言をせざるを得なかった

ということでしょうが、それにしても威張っていますからね、あの人は。

質問26 せざるを得なかったというのはあるんですよ。

島菌 そういうことはありますが、小林秀雄は、いんちきがたくさんあるから。本当に、批判的に読んだ方がいいと思う。でも今日は小林秀雄の話ではないから。

質問27 ありがとうございます。非常に重いテーマで、しかし非常に私は感動いたしました。

葬儀の在り方、葬儀の仕方といいたししょうか。先ほどの話の中でも死者の魂の供養とかですね、あるいは祖霊の供養とかございました。「千の風になって」という歌の話をされたんですけども、元来日本人というのは非常にアニミスティックな世界に生きてると私は思っています、そして組織宗教が入ってきて、いつの間にか組織宗教によって葬儀というのが牛耳られるようになりました。しかしよく考えてみると、例えば子供たちがよく見る宮崎駿のアニメがございますね。「トトロ」、あるいはこの「千の風になって」もそうなんですけれども、非常にアニミスティックな世界がある。おそらく葬儀の在り方というの、今後変わってくるんじゃないか。例えば樹木葬とかそういうことがございます。要するに今までの伝統的な慰められ方では収まりがつかないところが、実は日本人の心の奥底にあって、そういうものに最近気付き始めてきている。例えばインターネット葬とかですね。今後どういうふうな方向に行くのかということをお教えいただければと思います。

島菌 日本の仏教は見事な展開だったんじゃないかと思うんですね。アニミスティックなそういう死者との連続性の意識みたいなものを見事に取り込んだ。これはまた中国でもやったし、もちろん韓国もやったんでしょうが、日本の仏教はそれを徹底してやった。これは一つは檀家制度がありますよね。無理やりくっ付けたということがあります。ですから仏教はアニミスティックなものを排除しないで、むしろ保存したということがあるんですね。仏教のお陰で保存されたということです。

ですから今、韓国には、チェサという死者のための儀礼がありますが、急速に衰えていると思います。おそらく日本の方が、仏教教団がやっているのでしふとい。韓国では親族が儒教式にやっているわけです。日本では仏教が関わって長い間やってきたので、おそらくその方が保たれる傾向が

強い。

質問28 韓国はこの頃はキリスト教がはやっていますね。

島菌 ですからキリスト教がはやる一つの理由は、チェサをやらなくてすむから、という話も聞いていますが。

質問29 それだけではないんですけれども。例えば若者たちは祭祀なんかしたくないのは事実です。

島菌 それから火葬が今、世界的に広まっていますから、韓国のお墓の在り方はがらっと変わってきているし、カトリック圏も火葬が広まるということで大変な変化をしますと思います。それに比べると日本は、変化の仕方はややゆっくりになるのかもしれない。もちろん自然葬や樹木葬、それからさっきの合同墓みたいな、そういうのが広がってくると思いますけれども。

質問30 それで今のことで、葬儀の後のお墓とか祖先祭祀のことなんですけれども。今、私の父が2年前に亡くなりました。去年お墓を作ったんですが、今の新しい霊園には伝統的なお墓はほとんどなく、洋式の横型で「ありがとう」とか「愛」とか刻まれているお墓は、イメージでいうと7対3ぐらいで新しい型が多いです。これは非常にヨーロッパ的な欧米的な、まさに個人墓に近いようなお墓がずいぶん増えてきているなと思いました。

それで今日お話に出た、縦の命のつながりということに関連して、これはモラロジーの中でも非常に重視されている考え方なんですけれども。それと祖先祭祀との間の関係についてですが、ある意味で祖先祭祀が受け継がれていく、あるいは受け継がれなければいけない義務という形で、いわゆるお墓のお守りだとか、仏壇のお守りであるというのが、ある種縦の命のつながりを保障していた部分というのがあると思うんです。しかし、現実の問題として、私たちの世代になってくると少子化で、長男長女の結婚、一人っ子同士の結婚とかということで、祖先祭祀を受け継ぐことがかなり難しくなってくる。一つの質問は、まず既存の仏教集団の中で、こういう結婚に対して何らかの方針というのを打ち出しているようなところというのは、先生のご存じの限りであるかどうかということと、それからそういう形での祖先祭祀が受け継がれない場合、今日の桜の話というのは非常に印象的で、私はこういう事例というのはやっぱりエコロジーとか、環境問題を考えても非常に重要だと思うんですけれども、何か他の形でその縦の命

というのを担保していくというのは可能なのだろうか。ちょっと先生のご意見をお伺いしたいと思います。

島菌 仏教教団の方とお話する時には言うんですが、我々までは死者が増えます。私は80歳、85まで生きないような気がしていますが、そのぐらいまではとにかく死者の数が増えると思います。その後、人口カーブがぐっと減るので、確実に葬儀による収入は減る。それからもう既に、御布施の額がどんどん減っていると思います。何であんなに戒名料あげなければいけないのかということについては、今の人は皆しっかり考えるから、今までのやり方では仏教教団は持たない。実際にお寺側もいろんなことをやっていますよね。個人墓をやっているのもその一つです。

それから上田紀行さんという人が『がんばれ仏教』という本を書いています。あそこに出てくるのは、もっと社会活動をやる。そういう形でとにかく人との接触をつくっていかなければ駄目だ。Engaged Buddhismという言葉が今使われています。社会参加仏教ですね。これはまた同時にそれは日本の仏教がアジアや西洋の仏教に影響を受ける時代になってきたということです。アジアや西洋の仏教のやり方を真似るんですね。台湾の慈濟会というのは巨大な慈善団体ですね。そういうやり方をおそらく真似するようになってくるだろうと思います。それでも辛いと思いますね。でもそういうふうにして仏教教団は弱ってくるに違いないのですが、にもかかわらず日本人の死の意識はずっと仏教と結びついていく面が強いと思います。

質問31 仏教教団の方からというのは、例えば具体的な家族のお墓のお守りであるとか仏壇のお守りに対して何らかの提案がありますでしょうか。つまり現実にはもうお墓を守れない家庭というのはたくさん出てくるわけですね。それに対して何らかの、両家墓とか、形では合同墓とか出てきていますけれども、どうも必ずしも是認というか、もう仕方なく認めている感じなのかなという感じがします。

島菌 ですから個人墓の方へ少しシフトするとかいうことがあります。両方やる場合もあります。家のお墓もあるけれども、境内に個人墓的なスペースも作るというふうなことをやっている所もあります。

質問32 同意するという感じなんでしょうか。教団としては、お墓の守り方はどうすべきというのはあるのでしょうか。

島菌 ある程度、ニーズに応じていかないと持たないということでしょうかね。

質問33 よろしいですか。島菌先生が『現代救済宗教論』という本で、新宗教の諸類型を書いてみえますよね。その中にモラロジエが入っているじゃないですか。それが今日示された現世主義的な宗教性という、この欄に入っていないのは何故でしょうか。

島菌 実践倫理宏正会というのも似ている。修養団体で、新宗教とも近いけれども、一応広くとれば入るけれども、ちょっと迷うのはですね、実践倫理宏正会というのは、私は編者じゃないんですが、『新宗教事典』というのに、新宗教団体として入れたらその団体から宗教じゃありませんからという抗議がきたそうです。ですので当事者の意思も大事なので、モラロジエは宗教だと言うとですね、違うよと言われる。叱られるんじゃないかなと思います。

質問34 本の方に入っていますから。

島菌 ただ廣池千九郎はやはり救いということをおっしゃっていると思いますね。ですから修養運動というには宗教的な面がかなりあるし、もちろん宗教の重要性というのはしばしば説いておられると思いますが。

質問35 モラロジエはつまりキリスト教徒もいるし、仏教徒もいるし、すべての宗教、神道の方もいるし、それらすべてを尊重しているわけですよ。やっぱりこれを、例えば立正佼成会にしても、天理教にしても、ここに出てくるものではそういう現象は起こらない。創価学会も一つの完全な宗教と言えらると思うんですけども。

やはりモラロジエの持っている学問性というのは、そういう既存の宗教をすべて尊重しているというところにあるんじゃないか。だからそういう新しいセクトとして現われたならば、前の既存の宗教を否定して新しいセクトになっていることがありますでしょう。そういう点、どうお考えになりますか。

島菌 日本の宗教の場合は、そういうふうには他の存在を排除しない。共存できる。それからお互い包摂し合うという考え方を持ったものが非常に多いと思います。法華経的な仏教もですね、創価学会の場合は他は全部駄目だという考えですが、法華経の中にはすべてのものが入っているので、他の団体の知恵も尊ぶというふうな立場を取っているところがあります。も

ちろんそれからお葬式は仏教でやっても構わないというふうな神道系の宗教団体もたくさんありますね。ですからその点ではつながっている。確かに修養系の団体は宗教ではないということをはっきり打ち出すことによって、諸宗教との共存ということが強く出ていると思いますが、その共通の特徴はかなり他の日本の宗教団体にも出ている。

質問36 立正佼成会の場合、法華経が中心になっていますよね。しかしその中に、つまりキリスト教徒で立正佼成会員という人はいるわけですか。

島菌 生長の家はそうになっていますね。例えばブラジルの生長の家は、生長の家だけれども、カトリックだという人は非常に多いと思います。生長の家は一時期、自分たちは宗教じゃないと言っていたこともあったと思います。東洋哲学だといっていました。少なくともブラジルではそういう主張を持っている。それは生長の家は、「万教帰一」と言うと思いますが、もともと大本教が「万教同根」と言っていたので、その流れを引いています。ですからすべてのものを包容するというのは、日本のそういう宗教運動、修養運動に共通してあるような流れではないかと思います。

質問37 ですからそれが全部の特徴で、すべてを飲みこんでいくベースにあるのはやっぱり神道的なものなんじゃないでしょうかね。立正佼成会の場合も非常に現世肯定的になっていますよ。しかし仏教そのものはインドにおいては、苦から逃れるために現世を肯定していなかったじゃないですか。苦からいかにして解脱するか、逃れるかというのが、一つの釈迦の教えであったわけですからね。仏教は、現世そのものを大肯定して始まっているものじゃない。これが日本に入ってくるとすべてが現世肯定になってくるわけですよ。

島菌 まず最初の話ですが、そもそも中国の仏教も儒教の影響を相当受けて、三教一致というふうになって、一部は大変現世主義的になっていましたので、神道の影響というよりは東アジアの共通性と見たほうがよい面があります。もちろん日本に来て、もう一つそう言ったという面があるかもしれないけれども。

それからモラロジーの特徴は、やはり学者が始められた団体なので、学問を重視する特徴は他の新宗教にはあまりない。立正佼成会は小学校を出た方が始められたので、学問をすることは信仰の本来のものから離れるみたいな考え方があると思いますね。一つはそこですね。

それから、そのこととつながりますが、モラロジーは論理的に構成されているという側面から言うと、さっき言ったことの中には日本では論理を通すということをしないので、いろんなものがうやむやになる傾向があるということでしたが、それと違う方向を持っているんじゃないかなということが一つありますね。

質問38 ありがとうございます。そういう問いを敢えてしたのは、道德科学研究センターがここにありまして、我々は最近、2度ぐらいの大きな国際会議をユネスコや国連大学を結んでやっているんですね。共同主催しています。それはもし宗教とか、新宗教とかセクトとかの方のカテゴリーに入っていたら絶対できないことなんです。つまりユネスコは特定の宗教との協力はしないんです。公平に見なきゃいけないから。だから共催というのが出来るというのは、ユネスコの方で道德科学研究センターを学術団体と見てくれているということなんです。ですからその点で、モラロジーは学問だとおっしゃっているのは、非常に正しいんですけども、こういう諸宗教の類型の中に一緒に出てくると、我々としては将来そういう国際機関とか、あるいは大きな大学との共催が難しくなってくる。

島菌 他の日本の修養団体なり、宗教団体なりみると、いろいろ工夫をしています。そもそもこんなにたくさんの団体に分かれてしまっているということが、これはアメリカがそうですが、日本の一つの特徴で、何でそうなったのかなということを考えておく必要があると思うんですね。

仏教教団が四分五裂になったということがすごく大きいと思うんですけども。これはまた法然が仕掛けたみたいなのところがあると思います。そうしますと、それぞれの団体は皆、小さな団体に過ぎなくなっちゃうわけです。小さな派に過ぎなく、セクトに過ぎなくなっちゃう。何とかしてセクトじゃない、ある種の普遍的な地位を求めようといろいろ工夫することになります。その中に他のものと包摂したり、協力するという、そういうパターンができてきたと思います。

質問39 よろしいですか。中村元先生がですね、語源的には非常に独自なご解釈でしょうけれども、「宗教」という言葉を挙げて、「宗」というのは、いろんな宗教の根本の真理みたいのものであって、ただ必ずしも言葉で十分表現できるものでなくて、「教」の方が、いわゆるセクト的、それぞれの宗教の独自性をいうものであって、本来はその両方から成り立っていると

おっしゃいました。これからは、ユネスコのお話もありましたけれども、宗教の多様性ということも現実としては大事ですし、それぞれの民族に応じたあり方としても多様性は維持されるべきだと思わなければならないけれども、共通の面ですね。できれば宗教家じゃなくて、やっぱり宗教学者の方のご任務ではないかと思うのでございますけれども、その共通の面をはっきりさせていただく必要がある。宗教学だけじゃなくて哲学なんか非常に宗教と関わる点が多くて、特に諸宗教の接点をいくような、例えばハイデガーなんか本当にそうでございます。いろんな人がいるわけです。哲学者とか。そういうところからですね、宗教が嫌いだとか何とかって言う人も取り込めるような、論理性とか知的に納得のできる、だけでも具体的なあり方はどういうものかということについては、自分で選択する。何かそういうようなことで世界の宗教は手をつながなきゃならない時代だと思えます。

質問40 それをやろうとしてパリのユネスコ本部でシンポジウムをやったんです。それについて本が出ましたけれども、その報告書で、発表者をご覧になると、カトリックの大司教が出ているわけですね。仏教の東大寺の長老も出ているわけですね。その頃の管長です。イスラムの大学者も出ているわけです。そういう人が出てやった会議、しかも聖俗の拮抗を巡る東西大会です。だから「聖俗」ということで、ちゃんと宗教を表に出してやったのがあの会議なんです。おっしゃるようにそこの接点、通底するものを探り出すことがねらいです。そういうことです。

島藺 カトリックの方と話していると、やっぱり実は他を認めているように認めていないんだなと感じます。自分たちがすべてだと思っているんだなと愕然とすることがありますね。そこにいくと、日本人はあっさり、宗教というたくさんあるんだということに認め過ぎている。宗教という言葉がややそっちの方向に引っ張られて日本語になっちゃった。religionということの中には the religion みたいなのところがある。それが religions の方へいった。宗教というところごとそあって、皆、勝手なことを言って勢力争いをしているという理解になっているんですね。むしろ道とか法とかいう言葉の方が、religion の元の意味には近いので、そういうものに皆が近づいているんだということなんです。

それからもう一つ、カトリックのことをけなしたので、もう一つけなしたいのは西洋哲学なんですから。西洋哲学をやっている人は、西洋人

は当然なんです、日本人の先生こそ頑張っていたきたいと思いますが、西洋哲学こそ哲学だと思っているんですね。

質問41 僕は全然そう思っていない。

島菌 ですから先生のような方に、絶大なる共感を持つのはその点です。あんな哲学の意識はまるっきり時代錯誤だと思います。それこそ東洋の諸思想、もちろんイスラムもそうですが、そういうものを合わせてものを考えていくべきで、人類共通の哲学をつくっていくべきなのです。

質問42 そうですよ、大賛成だな。今日のお話が大変良かったのは、歴史的に非常に精密な話であり、そしてそれを資料に基づいてきちっとやられていることで、非常に学問的にも本当に深い話であったことです。僕はずいぶん教わりましたよ。例えば加藤咄堂という人がいて、こうこうというようなところから始めて、井上哲次郎なんかにもいって、彼らの限界はどこかということが僕にも段々分かってきた。逆に共鳴を覚えたところというのは、やっぱり吉田満だな。これはやっぱり読まなきゃいかん。僕は読まなかった。『戦艦大和』。有名な本ですよ。死とは何かを本当に知るためには、立派に正しく愛を築いてこの世に生きねばならないんだと、こう言っているじゃないですか。これこそ正しい。これこそ本当の意味ある死を理解するキーワードですよ。正しく愛を築いて生きねばならぬ。それでなきゃ本当の死はないんだと言っている。だから、「忠君愛国ばんざい」、それから何だかんだ、こんなものに騙されてはいけないと言っていますね。これは彼の体験を経てここへきた本当に貴重な証言ですね。僕は、非常に感動をもって読みましたね、これを僕は全部読まなきゃいけない。

それからその次。その次いろんな重要なことがあったけれども、今、小田川先生が言われて、そして服部先生も言われて、最後に言われたように、西洋とか東洋とか言っているのは、もう21世紀じゃないよ。儒教が正しいの、仏教が正しいの、キリスト教、イスラムが正しいの、そんなこと言っていていいんだろうか。このことを根本的に問わなきゃいけない。それでじゃあお前さんはどう考えるかということで、先生に差し上げました本に書きましたけれども、そこには儒教を取り上げて、そして仏教取り上げて、キリスト教を取り上げて、ソクラテスのギリシア哲学も取り上げて、それを通して考える。その時に先生の「スピリチュアリズム」についての本をぜひ読まなきゃいけないと僕は思っている。それはどういうものかと言う

と、今日述べられたことで言うと、生命主義的なものなんです。そうすると、僕は知らなかったけれども、黒住教、天理教、大本教、霊友会、立正佼成会、創価学会、皆言っているじゃないかと、こういうことになるんだが。僕はそこで非常に違和感を持つのは、こういう宗教に対して違和感というか、欠点があると思うのはどこかと言うと、生命主義はいいし、平和主義も賛成、それは共通するんだが、まずもっと宇宙論をやってもらいたい。この人たちに。この宇宙がどういうふうビッグバンから始まって、そして形成されて、生命が創造されて、その中に人間が形成されていくのか。この過程をしっかりと追ってもらいたい。そうしたら生命主義、主義じゃなく、透明な事実になってしまう。宇宙は生きています。もうデカルトの時代じゃない。西洋哲学の時代じゃないとおっしゃったけれども、もうデカルトの時代じゃないんだから。宇宙論をやったら自ずとこれになる。

我々は137億年ですよ、宇宙の生命はね。その中で45億年地球の歴史があって、36億年、生命の歴史がある。それを全部通してみる。そうすると、その中に人間が生まれたんでしょ、その進化の過程において。そして宗教も作りだした。作りだしたから決定的な価値はないと言いませんよ。作りだしたのは作りだした理由があるんです。どうして生み出したのか。それはヤスパースが言ったように、精神革命の時代の大きな意味なのです。だけどヤスパースはやっぱり一つの文明圏から出た一つの見解だから、僕はちょっと違ったやり方でやろうと思っています。

宇宙の歴史の中で、僕の人生、ここからここまでですよ。長くはないですよ。この宇宙のこの遺伝子の流れから生まれて、また宇宙の中に入っていくわけです。ですから、『葉っぱのフレディ』の話と根本的には同じなんです。葉っぱが育って木が実って、そして枯れてくるじゃないですか。そしてまた次の世代の肥やしになるじゃないですか。人間だって同じですよ。ただ人間は考えるからね。植物は考えないけれども、人間は考えるから、いろいろとがたがた言っているけれども、そんな小さい区別なんかは捨てたほうがいい。通底するものとおっしゃったが、それがあつたんですよ。それを発見すること。

そしてつまらない宗教戦争や殺し合い、何だかんだやって、キリスト教とイスラム教とががんやっている。ああいう馬鹿馬鹿しいことをこの地球上からなくすこと。これが哲学か宗教か僕は問わない。どっちでもいい、

そんなことはどっちでもいい。我々が幸福に正しく生きて、そして死ぬ時に意味があったと思えるようなことをしようじゃないですか。ただそれだけです。それが宗教か哲学かあるいは他の科学か、そんなことはどっちでもいい。

今の宇宙論、宇宙の歴史によると、宇宙は生きているんですよ。そうすると、具体的にはどういうことかということ、キリスト教にはスーフィズムがありますよね。あれは、宇宙と一つになるという考えがあります。イスラムにも神秘主義があるんですよ。アナハックといって、私が真理だ、私が宇宙だという感覚があるんですよ。神道にももちろんそういう考え方があるし、新儒教、朱子学もそうなんだ。宇宙と一つになろうとしている。そういうことで、僕は、根本がつながっているように思うんですね。だからそういう点をはっきりと出していくべきだと思う。つまらない瑣末なことにこだわって、それこそ宗派別の喧嘩をいつまでも続けているんだと思う。こういうことは一つやらなきゃいけないんじゃないだろうか。これが今日お話を聞いていると、先生もそっちを目指している。僕もそういう方向を目指したいと思っているわけです。

島菌 先生は、日本の例えば新宗教団体とそこは違うんだとおっしゃいましたけれども。

質問43 僕は宗教団体と全然付き合っていません。創価学会ともどことも付き合っていませんから。

島菌 要するに科学と宗教は別のものだというのが……

質問44 それはダメです、それは根本的にいけない。

島菌 それは西洋の近代にできた考えですが、日本の宗教は、これは神道系の影響が強いところは特にそういうことがあると思いますが、それが無いと思いますね。科学と宗教が一致するという考え方ですね。

質問45 でも日本の科学というやつがふやふやしていますからね。これがダメなんですよ。日本の科学というのはまだはっきりとどういうものなのか、自然とどういう関係があるのか、これをもっと一方においてしっかりさせなきゃいけない。先生も、科学と宗教という問題に関心を持たれていると思います。もう一つ大きな問題が残るんですよ。それが対立であり、一方が、どちらかがどっちかを支配するんだという考え方は僕は間違いだと思っています。僕みたいに科学をやって、次にこういう問題に興味を持

ってきた人間にとっては、全然二つのことじゃないと思う。

ですから、最近の宇宙論を読むと、本当に宇宙論でも生命論でもそうなっていますよ。ただ、伝統的な科学者は気付いていない。専門家だから、全体として見ようとしな。そのために、それこそ小さいことにこだわって、がちゃがちゃやっている。全体的に見たらそうなっていると思う。だからデカルトの人間論もダメです。精神と物質だとかね。それから真理の「真」と信じる「信」の対立とかね。

島菌 ただ、そういう一宗一派でこだわることは良くないことなんです、しかし伝統というところから見ると、そういう狭さを持っているからこそ伝統を保てるというか、そういう面があります。

質問46 そうなんです。だからね、それは狭い伝統ですね。人間、宇宙という大きな伝統を考えましょうよ。そうしたらその中の本当に極端に小さなものですよ、言い争っているのは。

司会 司会者の特権で最後に一言お尋ねしたいんですが、最後に先生が趣味の世界だとおっしゃって一茶を出されました。浄土真宗では妙好人というのがありますよね。妙好人的な生き方というのに、私は非常に懂れているんですけども。先生は妙好人的な生き方について何かお考えがありましたらおっしゃっていただきたいんですけども。

島菌 妙好人というのはですね、妙好人伝をつくるために、真宗の説教者が自分たちの良いモデルを集めて回ったという特徴がある。どんな宗教的伝記にもそういうことがあると思いますが。そういう特徴を勘案しながらみると、相当共鳴できるんじゃないだろうかと思います。

一茶の良いところは、きれいな話ではないというのか、人間の悟りきれないところを露骨に出しているという点ですね。ずいぶんひがみっぼいんですよ、この人の話はね。「痩せがえる負けるな一茶」とかね、自分が痩せがえるになったつもりでしょう。ずいぶん図々しい話だと思うんですよ。

質問47 「やれ打つなハエが手をする足をする」。これも一茶でしょう。これ優しいじゃないですか。

島菌 結局自分がそうだとやっているわけですから、ひがみっぼいと言えどひがみっぼいんです。ひがみっぼいということは、自分が暴力の側に立つ、そういうことをよく自覚しているというか、いじめられる社会で生きているということを非常に真摯に受け止めているというか、それが非常に

現代的だと思うんですね。人間の嫌な面、弱い面というのをよく分かっている。だけど一緒に生きていこうじゃないかというふうなメッセージを持っている。そういう感じですね。それはおそらく「妙好人伝」の中にもあると思いますが、ありがたい話になっちゃうとちょっと違うかなと思います。

それが江戸時代の文学は、井原西鶴みたいに、徹底的に、何と言うんですか、エゴイズムの世界を丸出しにして、しかし共感を引き出そうとしている。そこが結構現代的なんじゃないかなという気がするんですね。

質問48 僕が今まで良いなと思っているのもずいぶん出されました。「露の世は露の世ながらさりながら」なんて、これ本当に良いですね。そして「是がまあつひの栖か雪五尺」も、本当に良いと思う。だけどね、本当にひがんでいるよね。人生に情熱持っていないんじゃない。せっかく生まれてきたんだから。

司会 予定した時間、ちょうどになりました。先生には本当にありがとうございました。

(編集者注：本稿は、平成20年6月21日に開催された、モラロジー研究所道徳科学研究センター主催の「公開講演会」の内容を収録したものである。)